

甲陽だより

発行所
 高松町3番7号
 甲陽学院同窓会
 電話 西宮(0798)3622番
 郵便番号 663
 編集人 原 清
 印刷所
 株式会社 相谷印刷所
 大阪市生野区生野田島町1-537
 電話 大阪(758)2565番

甲陽学院同窓会東京懇親会

華々しく開催さる

昭和四十七年十月十四日の午後、東京・銀座の日航ホテルは、「オールド」甲陽健児の熱気でむんむんしていた。

この日、初めて第一回卒業生から現在までの東京在住の甲陽OB懇親会が行なわれたのだ。集まったオールド・ボーイたちは「二期の人。久しぶりに顔を合わせた。同期の花」と昔話に花を咲かせ、グラスを交して旧交を温めた。

会は午後三時過ぎ、中川経治氏(元甲陽学院教諭・現在ドイツ大使館勤務)の司会で始まった。まず、この日のために関西から駆けつけた林連一・甲陽学院校長が約一〇分、母校の近況を報告した。特に最近の進学状況について、その好調ぶりが伝えられた。

林校長の挨拶が終わると、第一回(大正十一年)卒業の熊倉成一氏(佐藤国際特許事務所)の音頭で乾杯が行われ、会食が始まった。

さらに、原清・甲陽学院同窓会会長(第五回卒業・現在朝日放送社長。民放会議のため欠席)の代理としてやはり関西から上京の合田孝治・同窓会本部相談役(第一回卒業・公詢社

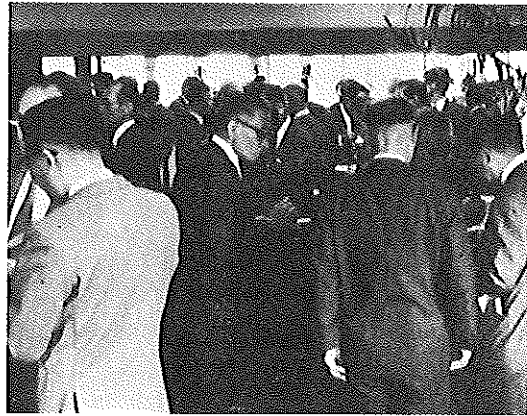
相談役)が挨拶にたち、同窓会の現況報告が行なわれた。特に同窓会費の集りが芳しくなため、運営に支障をきたす点を強調、東京在住会員の一層の協力を要請した。次いで第二回山谷頼三氏から丹精のミニ盆栽が林校長の手に寄贈された。また辰馬修一氏(辰馬育英会理事長・第一回卒業。現在辰馬本家酒造専務)から「白鹿一合ビン」が九〇本寄贈されたこともあわせて報告され、満場の拍手を浴びた。

自由懇談に移ると各テーブルをはきんで四人、五人と、人の輪ができ、近況を伝えあったり、甲陽時代のエピソードを語り合ったり、またあちらこちらから笑い声が弾け、会場はたちまちなごやかな雰囲気包まれた。

戦後派では三九回卒業(昭和三十三年)の九名、四二回卒業(三十六年)の八人、四十五回卒業(三九年)の八人などが目立ったが、戦前派では二〇回卒業(昭和十六年)が八名、八回卒業(昭和四年)が一〇名と、意気軒昂などこ

ろを見せた。第二阪神国道が貫通し、マンションが建ち

並ぶ今の甲子園からは想像もできない「枝川時代」の思い出。夏の甲子園大会(当時は鳴尾球場)で劇的な優勝を飾った瞬間。別当薫氏(18回卒業・現在広島東洋カーブ監督)を生み出した甲陽野球部の黄金時代。戦時中の軍事教練。戦後、校舎の一部が進駐軍に接収されていたことなど、華やかで、甘酸っぱい青春の記憶が再現され、それはとどまるところを知らないほどであった。



オールド・ボーイたちの熱い血潮は、後半に入って、司会の中川氏が出席者を一人ずつ

紹介しはじめた時も、いかなる発揮された。大先輩たちに圧倒され、遠慮がちな戦後派の紹介が終り、「旧制時代」に移ると、同窓会に対する苦言やアドバイスが飛び出したり、

「戦前、甲陽といえは、ああ野球が強い、と誰もが知っていた。最近では、残念ながら二、三回戦で姿を消してしまうので、新聞を見ていつもがっかりしている。進学率と同じぐらい、スポーツでも活躍してほしい」という山中文夫氏(五回卒業元共栄特殊鋼鉄取締役社長)の挨拶に「そうだ、」の声もかかり、林校長も謙虚にうなずく。さらに谷口恒次氏(五回

卒業・現在座間電機製作所社長)から「別当監督を応援しよう。後援会を作ろう」という声もでたりして、また一きわ大きな拍手が湧いた。そして第四回卒業になると、小泉功氏(現在湯浅商店社長室長・有名な宗教音楽評論家)が、女優山本富士子さんの父君、小森清氏(四回卒業物故)の思い出をひとくさりしたあと、伊集院武雄氏(四回卒業・現在三菱石油常務室調査役)が元気のよい声で、「空に連なる六甲の、山の緑を窓にして」と歌いはじめる。たちまちそれは大合唱に変わってしまった。このあたりがまさにハイライトで、負けじと第二回卒業の山谷頼三氏(現在小林紙業勤務)が、「フレ、フレ、パンジョーの者オー」と、創設時の意気をデモンストレーション。最後に第一回卒業の熊倉氏が「次の機会には必ず萩原淳・将棋八段を出席させる」と挨拶した。

東京に再現された「枝川の青春」は、五時過ぎ、「甲陽学院高等学校校歌」「甲陽学院応援歌」「甲陽学院のうた」を次々合唱し、同窓会本部から出席した中島久教諭の音頭で甲陽の発展と会員の健勝を祈る萬歳三唱で、二時間余にわたる第一回甲陽学院同窓会東京懇親会は幕を閉じた。

林連一校長の話、「大変盛大なので驚いている次第です。甲陽も時代と共にその表情を変えていきますが、内に流れる甲陽スピリットは同じ。諸先輩の方々の応援に今更ながら意を強くしている次第です」

懇親会開催に尽力した中川経治氏の話、正直のところこんな集まりに今更ながら想像もできませんでした。感謝しています。

これからも是非開いていきたいですね。会場の世話をして下さった深見弘平氏(41回卒業)、名簿作りやあらゆる仕事を手伝って下さった西本頼正君(45回卒業)にお礼を申し上げます。レポート45回卒業

東京懇親会

出席者氏名

(出席者氏名・敬称略・括弧内は卒業回)
 熊倉成一・合田孝治・土居信三郎(1)下条貞勝・広田勝夫・山谷頼三(2)山田米次郎(3)伊集院武雄・加藤誠之・楠本雅章(幸太郎)・小泉功・武藤正雄(4)黒田析雄・藤原研三・河野長策・宮部甫・山中文夫・谷口恒治(5)山崎正彦(6)大賀(黒田)小四郎(7)岡田督・小南弘之・塩見力・田坂(友永)久良・田川正雄・東浦安洋(武雄)山崎秀夫・山根(三上)敏徳・石山敏夫・利光平(9)山崎(熊城)正・田中鐘一・川延謙造(10)大木(相田)生三・秋田正義・藤田宗(11)浜野正男(12)原秀夫(病欠)・巻輔静彦(13)森田与三郎(14)・森島政之・若林亮(15)・今井芳文・高田輝雄・田中義人・宮尾彦太郎(16)・都築道夫・石関素介(17)・河合弘通・小林年光・藤木二三男(18)・今里恒雄(病欠)・広島泰・百瀬信政(19)・井上均平・大野一郎・豊田武・小林英夫・住野喜太郎・道工久・村田信義・森泰・山本忠光・山本不二雄(20)安西信夫・木下和久・田金一・木村恒喜(21)村尾喜樹・山西喜夫・当倉萬寿夫・立石恒・川端喜佐男(22)金子照和・今野信雄・溝口富夫・山本一郎・中川経治(23)加藤久夫・鈴木康允・藤井正俊(24)毛利博之(25)丸木正登(26)上田道雄・大宮洋・木村健・谷本裕範・樋口勝彦(27)砂村賢(28)但井浩二・吉田耕一(29)田川和裕・橋本浩二・吉井忠彦(30)音川忠彦・早崎健(31)井上修次・木下俊彦・四井光・重田洋・直場徳春・早崎淳(32)新井和夫・神田晴夫・深見弘平(41)友国雄一郎・永田幸夫・橋本進介・浜崎延雄・福田誠・吉田隆次・平野忠邦・播磨幹雄(

42)青木烈・斎藤知彦・桜井雄三(43)田中雅晴(44)石原浩行・川村厚郎・喜田勝治郎・新宮雄一・田中泰弘・西本頼正・橋本均・森本敬司(45)川西宏・野口善国(46)・法貴慶一(47)

東京懇親会世話人手記

中川経治(23回準卒)

全く大変な役目を引受けてしまった。一回の土居信三郎先輩から私の事務所に電話があつて、同窓会本部の奨めとのこと。東京で一度ぜひ同窓会を開いてはという話だそう、とりあえず四一回の深見弘平君と中川を連絡者として指名があつた。実の所、五年ばかり前に計画をしながら実現に至らなかつたという事情があり、その後は仕事と生活に追われて同窓会など念頭になつたこともあつて、土居さんの電話は聊か寝入端に落雷の感である。とりあえず深見君に世話を願つて銀座へと打合せに馳せ参じたのが七月の中頃。考えればそれから約三ヶ月後にあの東京懇親会が開かれたわけである。

準備の段階ではたと困つたことは、手元に新しい名簿がない点である。こちら方面に一体どれだけの同窓がおられるやら見当がつかぬ。従つて出席者の数など予定さえ立たぬ。しかしそんなことを言っていたのでは到底事が捗らないので、案内状の送付は一切同窓会本部でお世話願おうと腹をきめた。但し、期日・会費の決定、会場選定などの実務はこちらで進める事とし、深見君がこのために終始大変な努力を払われたのである。こちらで懇親会を開くことへの本部の基本的瞭解工作は土居さんをお願いし、その上で愈々本部との具体的交渉が始まつた。本部では同窓会常務理事の中島久先生(歴史担当)が窓口となり、先ず林校長と原同窓会長(当

日は合田相談役が代理で上京された)に上京していただく事を予定。こちらで作製の文案を基に案内状を本部が印刷の上、東京方面の同窓宛発送、返信の受取人に中川がなる。こゝうした大綱を固めつゝ、さて最も重要な同窓の反応を得る段階に入つたのが九月中旬である。返信は思ひの外順調で早い分は比較的古い先輩が多く、それも大部分が出席。欠席の場合でも理由を付し残念がらおられる状況はまことに有難く、大いに励まされた次第であ



る。四回の小泉功・五回の藤原研三両先輩は早速私宅に電話を下さり、会を盛上げるため知る限りの同窓に出席勧誘を行う旨お伝え頂いた。八回の田川正雄先輩は知人に連絡の外自身は当日の社員旅行に遅れてでも出席したいとか。また同八回の小南弘久先輩は偶然隣地区の住民で、これを機に一度遊びに来られたいとか。因みに四、五、八各回の際立つた出席数はこういう方々の御尽力の賜と感謝の外はない。その他連絡の電話は各方面から続々と頂いた。折り良く新版の名簿を入手したので、こちらから電話で通じ得た方も多し。肉声によると同窓の懐かしみも感じられて、未知の私如き者の勧誘にも応じて貰えた。住所不明の方が現れたり、物故者欄に記載の方が

辛づる方式で蘇生されたりして、しかも喜んで出席という返事まで得る始末。また転居先不明の案内状は名簿上の勤務先に電話で問合せ出し直しの結果かなりの方から出席の通知が戻つて来た。

戦後の学院卒業生とは幸ひ知友の関係でもあるので、多忙な働き盛りに無理をお願いを、なお且つ快く協力方お引き受け頂いた。四五回の西本頼正君などは当日用の出席者名簿作業、会場受付手順一切の考案という大役を自ら買って出下さり、どれ程助かつたことであろう。深見、西本両君の実務的才腕なくしては会の運営そのものも不可能であつた事を思い、改めてお礼を申し上げます。

三三回谷本裕範君、三五回砂村賢君、三七回橋本浩二君、三九回早崎淳君、四二回友国絃一郎君、四六回小西忠雄君等々、知友への連絡にあつた下さつた方々の努力も並大抵でなく、全くありがたい事である。とにかく会の直前まで同窓からの連絡があい次ぎ、出席予定者は予想もしい百二十名の大台に乗つてしまつたのである。

本部からも文書や電話による連絡が相つぎ特に辰馬修一学院理事長から清酒白鹿一合ピン九〇本を寄贈して頂けるとの朗報も飛込んだ。理事長にも是非御出席を願うべきであつたのに、旅費まで自弁でとは流石に厚かまし、遂にお願いしおびれたのが実情で、茲に感謝とあわせ深くお詫び申し上げます。

原同窓会長からは民放大会が鹿児島で催される期日と重なるので出席の困難な旨、皆様への伝言方依頼と併せ丁寧な連絡を頂き、宮崎前会長も広島から感謝と励ましの長文をよこされた。遠来の御心遣いに感謝の言葉も多い。

ところで折角校長先生・中島先生・合田先輩などの上京を仰ぐのに何も記念品が無いのでは申し訳なく、心のこもつた物と思ひめぐらす中で、ふと思い出したのが二回山谷頼三先輩のミニ盆栽である。早速お願いして見

東京懇親会に出席して

学校長 林 連一
同窓会幹事 中島 久

た所、何しろ丹精の代物、人様に喜で頂ければそれだけで十分、と流石は明治気質。こうして市場価格のつけようもない日本一の栽培が十数個、奇蹟の運びとなった。山谷さんの御厚志に改めて感謝を申し上げる次第である。大略こうした経過をふり返ると、懇親会そのものは一つの結果であって、むしろ準備段階で既に同窓諸賢の友誼が反応し合い、実質的な懇親が進んでいたとも言えよう。当日欠席された方々の気持もその意味で立派に参加の形をとっているのだと思う。そうは言っても「残念ながら今回は欠席、次回はぜひ」という返事を多数受け取った点、期日の選定についての世話人の責任を痛感しお詫び申し上げたい。藤原研三先輩からは戦前と戦後に計二回ほど東京で同窓会が開かれたと伺っている。古い先輩の御協力は実にこうした地盤の上に確保されたものであろう。然し甲陽も既に学制改革後の歴史に比重が増している。名簿で見る通り、若い層の東京進出は目ざましい。熊倉・土居両先輩(何れも一回)が陰では大へんな尽力をされたながら「もう自分達の出る幕でないから」と当日の代表挨拶を固辞された気持も理解できぬわけではない。私など丁度中間年代にある者として世話人や当日の司会を仰せつかったが、これは今回限りとしても、今後は先輩同窓の実績と見識、現役大学生も含め若い同窓の可能性と実行力を縦に結びつけるお手伝いが出来、外部にあつて母校甲陽学院の発展に少しでも役立つ者になり得ればと願っている。

最後に林校長先生・中島久先生・合田孝治氏の遠路御出席、これに伴なう本部の御助力に心から御礼を申し上げます。

◆附記

その後年始状も含め各方面からお便りを戴き感謝致しております。今後東京方面在住の同窓懇親会を時折開催して欲しいとの希望を多数の方より伺い、今回の幹事を仰せつかった者の一人として責任を感じております。

昭和四十七年度 会員大会に出席して

第23回卒 小林寧樹(文)
第53回卒 小林研一(子)

何といつても総勢二百名をこえる東京懇親会の盛大さには出席してみ、ただ驚くばかりでした。よほど世話人の方々の連絡がゆきとどいていたのか帰校してみても一層その感を深くした次第でした。私も出席させていただきほんとうに上京してよかったと感謝しています。これで東京における甲陽同窓生の基礎は確立したのと思います。出席してみても私も最も感激したことは戦前、戦後を通じて卒業生に断絶がなく母校を受する心情と熱意が満ち溢れていたことです。学校も前途は多難ですが必ずや卒業生のこの愛校心によります(発展してゆくものと確信した次第です。今後の躍進を期待して御礼に代えさせていただきます。

同窓会相談役 合田孝治

長い間念願していた、同窓会の東京附近の人々の会合が、銀座日航ホテルでもたれた。お膳立には土居信三郎、熊倉成一両氏の同輩や、中川経治氏が随分とご苦労して戴いたのであるが、出席して驚かされた。よくこんなに各回卒業生の同窓を集められたことかと、中川氏の名司会振りが、会を一層盛り上げて盛功裡に経つたのであるが、兼ねてから同窓会の仕事をして、感じたことをこんな会合にお話して協力を得たいと思うていたがその機会を与えて貰って有難いと思つた。幸いに皆様の御賛同も得られ、楽しい有難い、会となつたことは感謝のほかりません。

流石、首都東京だけに同窓の活躍せられている分野も多方面で、甲陽もこれを中心地に同窓会の據点が出来たのだと力強い感じが湧いてくるように思われた。

發起してお世話下さつた方々の御苦労には只々深くお礼を申し上げます。尚今後の育成についてもご無理をお願いしたい次第です。

昭和四十七年度 会員大会に出席して

第23回卒 小林寧樹(文)
第53回卒 小林研一(子)

突然、中島久先生より勤務先へ電話が掛り子供に、或は親子合作でも、感想文を云々との事であり丁度一月十四―十五日の連休に子供は下宿先より帰つたのですが、小生風邪気味で臥つて居りましたので伝言程度に終り、結局小生が責任上、親作として、拙文を投稿する次第となりました。

徒然なるまゝに、その日の午前中を過ぎて居た私も、ふと8月の此の日曜日は同窓会総会である事を思い出して出掛ける気になり、今春、後輩として卒業の息子を誘うと、余り乗気でない様だったが、連れ立って行く事となつた。私が通学していた時と勿論経過は違つたが子供にとしては通い馴れた径である。阪神甲子園に降り立つて西出口階段に向う時は、少くとも時代は異なれど二人の頭の何処かを通学時の色々々な思いが駆け廻つた。



桜花の咲き乱れる頃新一年生として、戦時体制下には隊列を作り「歩調取れ」の号令で校門を潜つた三十数年來の事が脳裏をかすめる。校庭では汗と脂にまみれたユニフォーム姿の野球部員(後輩)の姿を見、親しみを感じつつも、距離が余りにもあり過ぎるのか、言葉

を掛ける事すら私には出来ない。多分今頃の私(中学校時代)はボールの見える時間迄はボールを追い、見えなくなれば、グラウンドをランニングさせられて居ただろう。そんな事を

を考え乍ら藤樹の下を歩いて居た。ふと我に返つた私の傍に居た筈の息子がいない。友達を見付けたのか……、何時迄も子供……と思つて居ても……、それは当然私より勝手知つたる学舎へ来て居るのだ。受付付近は半分混雑して居る待つ間暫く、懐しい先輩、後輩の顔がチラホラ見える。同級生の姿を気化しく探すも見当たらない。ガツカリする。然し未だ私は良い、野球部に居た事と、ヤンチャ坊主であつたので身近かな先輩や後輩にすぐ話し掛けられる。遠路を久方振りにやって来て話し合える人として居なければ如何程味気ないものだろうそんな気持ちで帰られた方、又今迄に出席された方々でもう色々出向くのは「ヤメタ」とお考えの方もあるのではなからうか。これからは出席される人は一人でも二人でも友達と電話でも誘い合ひ参加する様な気持ちを持ち合えば、当会は益々盛会になるだろうし、空虚な気持ちで帰る様な人もなく、行けば知人に会え色々懐旧談や最近の動向、級友の消息を知る事が出来る有意義な一日を送れるのだと思われる会である様、参加する人々の心を通う会である様に希望するのは私だけだろうか。

口はばつた事を述べて恐縮だが此の会の後にクラス会をやつたりされて居る卒業生も居られたり、良い思い付きであり感心させられたものだ。受け付けの窓口を五十年位に区切つたりすることは知人を探すのにも楽だし話し相手も出来るのではないかと思われる。色々纏まりのない事を書き列べたが、空しい気持ちで帰る人のない喜び楽しい談話の会である様折念する一端と受取つて戴ければ幸甚。

四十日間世界一周の旅を終えて

同窓会会長 原 清

恍惚漫談

第六回卒業生 藤高 六助

四十日間世界一周の旅だった。——アメリカ映画「八十日間世界一周」なら道中にスリルあり、ロマンスあり、というところだが、幸か不幸か私たちの旅にはそんなストーリーを書き込む暇さえなかった。旅程がきびしく、交渉すべき仕事を盛り沢山に抱き込んで行つたため連日の強行軍。あとをふりかえつてみて、よくまあ大したトラブルなしに帰れたこと、という感慨もないではない。

大阪空港に帰着したとき、出迎えの人たちから「ご苦労さま」と言われた一言が、いちばん身に沁みて嬉しかったのも、あながち故国に帰りついた感傷と安堵だけのせいではなかった。

が、とにかくも私たちは帰ってきた。七月十九日、東の空に向かって飛び立った私たちは地球を一周する旅程を完遂して、九月一日予定通り西の空から帰つて来たのである。この四十日間の旅は奇跡的にも一日の雨天なくしたが、天候ゆえに旅程を変更したことも皆無、文字通り「お天気男(英語ではサニー・ボーイというのだそうだ)」の特急旅行だった。

その間、訪問した国は十カ国十九都市、この数だけで比べても「八十日間世界一周」よりも遙かに多い。もちろん、その使命は映画のような絵ぞらごとではない。私たちは大きく分けて三つの使命を携えて出発した。そして一応、その全使命の成果をあげて帰着したと信じている。以下は、その海外成果報告書である——。

第一の使命は、わが社がフランチャイズの一翼を担っているミス・ユニバース・ページェント世界大会に、私が国際審査員として指名されたための渡米である。

関係深い同業各社、関連企業代表者との交歓をパーティー形式で実施したのである。

パーティーは全世界五ヶ所で開催したが、少くとも四十名、多いところは二百名を越す盛況ぶりであり、ロサンゼルスでは、はるばるワシントンから飛行機で駆けつけたU.S.I.S首脳自殺したマリリン・モンローの検死で有名になった日系法医など硬軟とりどりの多彩な会合となった。

第三の使命は契約、調印だった。ロサンゼルスでは同地の日本語ラジオ放送局——ホームキャスト・オブ・アメリカと資本提携、番組提供、制作協力について合意を得た。さきに同社へ出向した塚越総支配人の活躍もあって、ホームキャスト社は最近とみに活気を呈していた。

モスクワ放送局——もつと正確にいうと連邦テレビ・ラジオ国家委員長議長レービン氏は元新聞記者、外交官(駐北京大使)の経歴ある人物だけに、人ざわりがよく、しかも仕事の上のことは隅々まで勉強し尽くしている、定評のある人である。

ねらいは間違いないかった。調印式当日——八月三十日午後二時、オスタンキノのソ連邦テレビ・センターの大会議室で、彼は両手をひろげて私たちを招き入れ、直ちに協定書に署名した。私も署名した。両者起ち上がって握手。ニュース班のライオンがひとときわ明るく光る中にカメラが回る。シャンパンの杯があげられる。まるで世界平和大会議の調印式みたいな光景である。この日モスクワのテレビやラジオ放送はこの調印式を数回にわたり放送し、特集プログラムまで組んだと聞いた。

この協定にもとづいて、さっそく我が社からシベリア沿線の取材班も出発するはずである。オーロラ光る国の赤いカーテンは、今やABCの手で静かに開かれようとしているのである。(あんでな一〇月号より抜粋)

額が広くあごひげの濃い人はいつまでも元気に長持ちし、精力・性力ともにあり、永くモウロクしない例です。有吉佐和子女史の「恍惚の人」の中に出てくる90才でゴパンにうつ伏せになって亡くなった鈴木さくらの頭には、毛が一本もないと書いてありました。それから明治会の偉い人の集まりでは、95%位まで禿茶ピン。禿茶ピン万々才である。白髪型は余りパツトしないということのように思われますが、政治家には二階堂官房長官・保利前官房長官・藤山愛一郎氏・民社党佐々木書記長・NHK平沢和重解説員・芸能界では大久保令氏等々なかなか意欲的な方も多いので、一概にはいえぬわけでございます。

以上を心、体、食の三つにまとめてみますと、心は「頭は使かえ、考えよ、気は余り使わず、心配事は特によくない。読書、旅行、T・V、碁、将棋、10時迄の麻雀、趣味の同好会などで楽しくやること。

特に歌舞音曲の如く同じ事を何回も繰り返し、修練するものは消えなるとする記憶素子を呼び起こすので恍惚防止には最適な趣味と思われまふ。体は「ラジオ体操、軽い早朝登山、軽くゴルフ(酷暑は避けること、極寒は絶対よくない)。睡眠を十分とること。食は「禅宗の坊さんの食べている様なものということに尽きると思っています。

藤高氏は現在、神港精機機会長、神戸商工会議所議員などに要職にあり、このパンフレットは今年、年賀状代りに関係者に配布されたものです。

高校入試の現状

甲陽の入学試験の現状についてご報告してみたいと思います。中学校の入試は三月一日から始まりますが、中学は何といつてもまだ幼いために受験者はその殆んどが西宮を中心とした京阪神の小学校の生徒さんですが、高校の場合は一、二、三年急速に遠隔の地からの受験者がふえています。たとえば去年の場合二四五名(合格者は四十五名)受験者があったのですが地域別で列記しますと次のようになります。()は合格者数です。

西宮三八(五) 芦屋一四(三) 神戸四五(八) 尼崎二五(五) 伊丹一三(五) 宝塚 九(三) 大阪二七(七) 京都一〇(二) 和歌山一〇(〇) 兵庫県内三一(四) それ以外の二三名は北

は北海道から南は九州に至るまで広範な地域から受験生が参加しています。本年はまだ集計が行われていませんので詳細なことは不明ですが、既に青森・山口・福井・愛媛の諸県からは願書受付初日に郵送されてきたようです。去年にひき続き他府県からの受験者は一層増加するものと推定されます。試験科目は、国語・数学・英語・理科の四科目で七五〇点満点。昭和四十七年度の場合は最高六三三点、最低五一五点でした。倍率は五、四倍ですから相当な難関といえるでしょう。

遠隔の地から合格してきた生徒は当然下宿生活をしなければならぬわけですから、高校は下宿の斡旋もしなければならぬかなが大変です。高校から入学した諸君は当初は追いつくために勉強が大変ですが、努力さえおこたらなかつたら高前年になるに従い、成績は年を追って向上するのが普通です。いつの年度でも十番以内には高校から入学した生徒が二、三名います。中学・高校の時代は能力とか素質とかいうことよりは、真面目にコツコツと努力することが大切でこのことは人生の生き方と結局は同じことだと思えます。

事務局より

川口半四郎

私は昭和四十七年六月一日より甲陽学院同窓会の事務取扱を致しています今後よろしくお願ひ申し上げます。

◎ 年会費の現状について

年会費の収入は四十七年四月一日～四十七年十二月三十一日までに一七九六口金八拾九萬八千円の収入がありました。年々増加を致していますことは会の発展のため真に歓迎しい事と存じます。会費未納の会員の方々には会の発展のためご協力下さいますようお願いいたします。

◎ 会員名簿(昭和47年度版)刊行その後

○発行部数 一五〇〇部
○売価 一〇〇〇円(郵送料代一四〇円)
○昭和四十八年一月末現在の売却状況

- 一四一冊 売却済
- 三〇冊 同窓会保存用
- 四五冊 教職員へ配布
- 一〇冊 法人保存用
- 四〇冊 旧職員用
- 一五冊 旧職員用
- 三九冊 売却済(現金未済)
- 一八〇冊 残部

昭和四十七年度版の会員名簿は道くなられた北村善一先生が責任編集をしておられたのですが、途中で急逝されたため、あとを受けついで校内幹事が不馴れなために満たない点が多くご期待に添えることが出来ませんでした。しかし野球部OBの大先輩である山野井 萬氏の如く、個人で戦前の野球部員数千人に会員名簿を寄贈されたようなご高情は同窓会として何とも御礼の申し上げますと共に大方の各位に対しご披露申し上げますと共にご厚情を賜わりたいと念願しています。残部少数ですのでご希望の方は至急本部までお申し込み下さい。

★会員名簿卒業回数別講入者数調

卒業回数	卒業人員	卒回人員	第十三回	第十四回	第十五回	第十六回	第十七回	第十八回	第十九回	第二十回	第二十一回	第二十二回	第二十三回	第二十四回	第二十五回	第二十六回	第二十七回	第二十八回	第二十九回	第三十回	第三十一回	第三十二回	第三十三回	第三十四回	第三十五回	第三十六回	第三十七回	第三十八回	第三十九回	第四十回	第四十一回	第四十二回	第四十三回	第四十四回	第四十五回	第四十六回	第四十七回	第四十八回	第四十九回	第五十回	第五十一回	第五十二回	第五十三回	第五十四回	第五十五回																																																																																																																																																																																																																	
1	回卒一六	卒回 人員	39	回卒一七	卒回 人員	40	回卒一八	卒回 人員	41	回卒一九	卒回 人員	42	回卒二〇	卒回 人員	43	回卒二一	卒回 人員	44	回卒二二	卒回 人員	45	回卒二三	卒回 人員	46	回卒二四	卒回 人員	47	回卒二五	卒回 人員	48	回卒二六	卒回 人員	49	回卒二七	卒回 人員	50	回卒二八	卒回 人員	51	回卒二九	卒回 人員	52	回卒三〇	卒回 人員	53	回卒三一	卒回 人員	54	回卒三二	卒回 人員	55	回卒三三	卒回 人員	56	回卒三四	卒回 人員	57	回卒三五	卒回 人員	58	回卒三六	卒回 人員	59	回卒三七	卒回 人員	60	回卒三八	卒回 人員	61	回卒三九	卒回 人員	62	回卒四〇	卒回 人員	63	回卒四一	卒回 人員	64	回卒四二	卒回 人員	65	回卒四三	卒回 人員	66	回卒四四	卒回 人員	67	回卒四五	卒回 人員	68	回卒四六	卒回 人員	69	回卒四七	卒回 人員	70	回卒四八	卒回 人員	71	回卒四九	卒回 人員	72	回卒五〇	卒回 人員	73	回卒五一	卒回 人員	74	回卒五二	卒回 人員	75	回卒五三	卒回 人員	76	回卒五四	卒回 人員	77	回卒五五	卒回 人員	78	回卒五六	卒回 人員	79	回卒五七	卒回 人員	80	回卒五八	卒回 人員	81	回卒五九	卒回 人員	82	回卒六〇	卒回 人員	83	回卒六一	卒回 人員	84	回卒六二	卒回 人員	85	回卒六三	卒回 人員	86	回卒六四	卒回 人員	87	回卒六五	卒回 人員	88	回卒六六	卒回 人員	89	回卒六七	卒回 人員	90	回卒六八	卒回 人員	91	回卒六九	卒回 人員	92	回卒七〇	卒回 人員	93	回卒七一	卒回 人員	94	回卒七二	卒回 人員	95	回卒七三	卒回 人員	96	回卒七四	卒回 人員	97	回卒七五	卒回 人員	98	回卒七六	卒回 人員	99	回卒七七	卒回 人員	100	回卒七八	卒回 人員	101	回卒七九	卒回 人員	102	回卒八〇	卒回 人員	103	回卒八一	卒回 人員	104	回卒八二	卒回 人員	105	回卒八三	卒回 人員	106	回卒八四	卒回 人員	107	回卒八五	卒回 人員	108	回卒八六	卒回 人員	109	回卒八七	卒回 人員	110	回卒八八	卒回 人員	111	回卒八九	卒回 人員	112	回卒九〇	卒回 人員	113	回卒九一	卒回 人員	114	回卒九二	卒回 人員	115	回卒九三	卒回 人員	116	回卒九四	卒回 人員	117	回卒九五	卒回 人員	118	回卒九六	卒回 人員	119	回卒九七	卒回 人員	120	回卒九八	卒回 人員	121	回卒九九	卒回 人員	122	回卒一〇〇	卒回 人員

★会員名簿整理について

毎回のことですが相変わらず甲陽だよりを送る毎に返送があります郵税の無駄を考へてまことに馬鹿らしいこととす今少し迷惑をかけるないようにしてもらいたいものだと思います。どうでもよい甲陽だよりと思っていられるかもしれませんがこのことばかりでなくいろ／＼の方面に不便をかけていることを考へて欲しいと思います。

住所の変更を知らず送ることを義務として下さい。七月発行の分まで返送のあったもの

小池健夫	島中謙一	奥田忠祐	成松栄太郎	高坂 毅	小川謙二郎	川野浩一	佐野幸政	室井博和	喜多河育造	菊地常治	呉竹 望	大村輝一	小野勝弘	打川和雄	塩野四郎	山田 一郎	西山 治	田中良平	堀岡卓男	奥山睦男	島中修治	林 佐吉	谷山公一	吉野準一	下村 尚	嘉部嘉雄	板谷俊助	福井健二郎	郡山正久	田中良樹	大島 隆	森 明	木村哲三	西田忠良	宮川雅行	岸 勝彦	面高邦昭	安田時雄	鯉谷信夫	鈴木研一	越知 隆	新宮桂一	金子俊六	矢野俊一	和田省一	野口善国	中村 進	神田修治	永井英明	藤吉成三	泉 健一	井下敏幸	志村厚一	河本俊樹	藤井龍雄	佐野公彦	山下 浩	西鼻 実	渋谷敏明	恒例による三者合同の懇親会は旧年十一月二十五日(土)午後六時より合田孝治氏のお世話によって元町の名代「かき十」で開催された。法人からは辰馬理事長、学校側からは小河教頭と校内幹事の六名の先生方、同窓会からは、前会長の宮崎氏、新副会長の桑田、藤井両氏加えて合田、伊東両相談役の14名が参加された。
------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	--

退任のご挨拶

太田 登



昭和十五年四月、財団法人辰馬学院甲陽中学校に勤務いたし、次いで同法人創設の甲陽高等商業学校、甲陽工業専門学校、更に学校法人辰馬育英会甲陽学院に勤務、昨年四月停年退職する迄、約三十年後甲陽にお世話になりました。

その時期は、国家としても太平洋戦争を中心とした未曾有の動乱期でありました。更に終戦に伴う混乱時を経て今日に至るいわゆる狂瀾怒涛の中を甲陽と共に終始しました。その間の甲陽の歩みも、勿論決して坦々としたものではなく、時局の要請とはいえ、甲陽高商、甲陽工專の廃校は、まことに痛惜の極みでありました。昭和二十二年には、学制改革によっていわゆる六三制が実施されて、甲陽も新制中学校高等学校に移行しましたが、当然とはいえ、色々々な点で、困難を伴っていました。

戦後の混乱は、新制度による第一回の新入生にも、暗い影をおとし、五百数十名の志願者の中から選ばれた九十九名のうち、中学校を卒業するときは、二十名以上も減少するというような挿話もありました。

それはともかくとして、先輩諸氏の残された長い伝統を受け継いで、以後二〇数年後の甲陽の変転が刮目に値するものであったことは言うまでもありません。

省みますれば、長い年月、碌々として、無策無能、何らなすことなく過しましたことを

思えば、内心慚愧たるものがあります。同時に、この間、法人理事各位、諸先生、先輩諸氏に一方ならぬ御指導と、温情を辱けなくしましたことに、深く感謝しております。

もし思恵を受けた人々に報いることが、その人の心を心として後より来る人につくすことであつたとするならば、それらの人々に報いる心を以て、多くの若い人々に対すべきだつたと思ひますが、唯その足りなかつたことを深く遺憾に思つています。

甲陽学院の限りない前進を心から折念いたしまして、拙い退職の御挨拶の言葉を終りましたと思ひます。

学 歴

兵庫県立第二神戸中学校、大阪外国語学校英語部を経て、九州大学法文学部に入學、法學士、文學士試験に合格。

現住所 西宮市南越木岩町十二番四号 太田 登

太田学級同窓会

中学28年卒 麩山進

太田登先生が昨年65歳になられ、甲陽学院を停年退職なさいました。昨春、偶然阪急梅田駅で先生とお会いした際このことを聞かされ、歳月の流れの早さを改めて思い知らされると同時に、いまだ變態とされて、お元気に話される先生を拝見して、とても第一線を退かれたとは思いませんでした。御退職といつても、昨今の教員不足と、特に甲陽のような一段高度な教員を必要とするところでは、なかなか後任に良い先生を見つけないとがむずかしく、講師の形で教壇に立つておられること、関西大学でも講義をされておられることなどをお聞きし、ひと安心いたしました。

ところで、私は甲陽学院中学校を昭和28年

に卒業（C組、42名）しましたが、三年間當時中学校の教頭をされていた先生に担任していただきました。不思議なことに、われわれC組だけはAB両組より常に10点ほど平均点が低く、勉強をあまりしない者が集つていたようです。このことについては、親の心子知らずというか、別にそれが為めに勉強熱心になろうという気運もなかつたばかりか、なお一層ヤンチャに輪をかけていたようです。従つて、運動会とか野球大会、英会話コンテストといった他の組との対抗ともなればフアイトを燃やし、好成績を収めました。中間、期末等の試験後の職員会議で太田先生が、C組の担任としてまことに申し訳ないといつも謝つておられたというのを聞いたのは、卒業してしばらくしてからでした。

卒業後数年間は同窓会も開いていませんでしたがそのうち途切れていきましたので、今度のを機会に先生の慰勞を兼ねた同窓会を開こうと昨夏から準備を進めましたが、何しろ十数年も多くの同窓生と音信途絶でしたので、住所録の整備に手間どりました。その結果、42名中すでに死亡した3名を除く39名のうち、33名の消息が分り、昨年十二月二日に大阪で同窓会を開きました。当日は先輩兼現役先生の代表として中島久先生も御出席願ひ、太田先生を囲んで総員21名と盛会でした。久賀田樋口、平松、宮里、吉沢の五君は東京から、林君は豊田からこの日のために集つてくれ、幹事の私としても本当にうれしく思いました。卒業時とほとんど変らないマスクもあれば、道で合つても分らんナアという変貌組もとりまぜての、中学時代のワンパク話に時のたつのを忘れて笑いの渦がつかまきました。

——エー、C組の平均点を10点も低くなるのに最も貢献した〇〇です。特に太田先生の英語はチャランポランでしたが、現在は会社で毎日英語で仕事をしております。——エヘン、当時は一番大きく、アダナも「デカ」でしたが、それ以後背が伸びず、今

では御覧の通り、みんなの方が大きい××です。

——エー、オナラの音からアダナが「ピュ」の△△です。現在の役職は部長代理です。——ナニナニ？私はいまだ平社員の方です。子供を甲陽に入れようか入れまいか迷っています。

太田先生は、子供は甲陽に入れなさいと言われました。やはり、甲陽はすばらしいと心から思つておられる先生を、いつまでもお元氣でとお送りいたしました。

なお、すでに亡くなられた赤塚俊輔君、辰馬誠一郎君、西垣正之君の御冥福をお祈りします。

クラス会だより

阪大甲陽会

去る、12月14日午後6時より、大阪大学に在学する48回卒業生の忘年会が、大阪梅田の「てつう」で開かれた。当日は、母校より恩師宮川先生をお迎えし（谷本先生はかぜの為御欠席）、特別参加の儀賀豊達君を加えて13名の同窓生が集まった。卒業後すでに6年、医・歯学部を除く他の者は、まがりなりにも研究室生活を送つており、話題も研究の苦労話からそろそろ多くなつてきた同期生の結婚まできわめて豊富で、またたく間に2時間が過ぎた。最後に、宮川先生より、「来年は給料取りの数も多くなるので、次回の集まりを多に楽しみにしている。」とのありがたいようなありがたいようなお言葉があり、散会し、各々、歳末のネオンの中へと消えて行った次第です。

〔当日出席者〕宮川秀一先生、天野利郎、池内英治、植田千裕、大塚昭、大野幸雄、小原秀夫、儀賀豊達、柴田健二郎、下田広一郎、中西保正、苗村康次、平松茂人、安間源司。（阪大工学部 精密 川辺研の大塚明記）

甲 陽 会

回を重ねること三回、東京在住と阪神在住の同窓が相寄り、名古屋に落ち合ひ犬山に一夜を語り過ぎすことに先の伊豆の会合を決めたことを、半田市に住む吉田氏のお骨折りで十一月十八日・十九日に実施した。

参加希望者が十九名であったが、野辺、伊



東・橋本・佐々木、四氏が夫々思わぬことで欠席せられた。今回は広瀬・長瀬・松本・三氏が初参加せられたが、只阪神間在住の人々より一泊では困るとの意もあるので年一回位はこの人々の会合も必要でないかと思われる。東京方面の人の時間おくれもあって明治村の見物は少人数となった。どうも建物は明治時代のものであるが余りの手入れの行過ぎで一寸其の感が薄れているように思われた。宏大な敷地に四十一の由緒ある建築物がある。見物も一日では消化不可能であると思うのを一時間余りでは無理なことで午後四時の閉鎖までを駆足で廻る。記念撮影を随所でやって

犬山に向う。宿にて全員揃うて夕食となった辰馬氏好意のアルコールが胃に落ちつくころになると懐かしい昔の思い出話に賑うた。

今回は其の上に同窓会のあり方にまで発展して一寸時を過ぎすのを忘れた形となった。

今回は東京の人々に岡山まで足を延ばして戴き米年六月頃にやることにした。宮崎氏が自信満々引受けたので楽しい会合となると思われる。今からお願いしておきます。是非多数参加して下さい。最早や、古稀の齡である。楽しく語らいたいものだ。

翌日は明治村、犬山城の見物と朝食后夫々に別れて解散した。

毎度のことですが今回も返信のない方が三分の一あった。やはり友として語るところはそれらの人のことである。返信だけではどうかすることに於て戴きたい。通信費用は集合するものが負担し合っているのですからその好意にでも報いて戴きたいものと思います。

第十三回卒同窓会

(一九七二・十一月二十一日)

苦楽園、芦山荘に思師朝田舜一先生をお招き申し上げ、私達 総勢二十八人は三十八年振りに先生との再会を喜び、又将来の健康を期して乾杯致しました。先生は至極お元気で現在、松陰東学園女子短大の教授として大いに



三平 泰平 中野 隆夫 木村 幸一 須賀 寿 里 田 文 朝田 舜一 野田 隆三 栗田 利三 岸 田 幸一 柴田 敏行 林 健 藤田 敏 光島 正典

甲陽中学 3期生 校友会 出席者
昭和47年10月21日 於 苦楽園 芦山荘

活躍せられ、余暇にはモーターの研究に没頭、パテントを幾つか持つておられる由、又御容姿も昔の儘とでも申し上げたいくらいお若く感じられ一同御同慶の至りでした。寄せ書きに「All is Vanity. 卽是空 Matter is Void. 空卽是色」と認められました。

お互いに迫って来た道の遠かったことを思いつ、語らいながらも太ったり瘦せたりでなかなか名前の思い出せない人も居られました。でも声を聞いてみると、その人特有の仕草や話のアクセントより次第に紅顔の少年時代の思い出が湧出してつきませんでした。

呑むほどに、酔うほどに校歌、応援歌で時の過ぎるのを忘れました。

戦争があつたのに、戦後の苦難があつたのに、あ、生きていてよかつた。ここ芦山荘に来てよかつた。そしてお互い健康で出会えてほんとうによかつたと思ひました。

明後年は卒後四十周年というので、私達同席の間から戦死或は病没された学友の霊を慰めるといふ意味もかねて大々的に記念総会をやろうといふことになり、初秋の有馬温泉に土曜、日曜をかけて一泊することと幹事に一人ということに決定しました。残念ながら今夜来られなかつた学友諸兄よ、その節には是非出席されんことを祈つてやみません。

尚、三平夷太郎・米田敏行・柴田忠雄・中野篤信・光島正典の諸兄には幹事として会場の設定其他で絶大な御骨折を戴き且つ次回もお礼を述べたいと存じます。

(参加者) 朝田舜一先生・幹事諸兄、真島登福永二郎・森田隆晴・巽 享・山崎 勲・豊田 実・井上倫蔵・梅田 一・足立昌平・木村幸一・篠田慎三・須賀 孝・菅田平太郎・河北耕三・林 健(旧姓 友国)

新春の喜びも新たな一月四日、梅田、東仙

間に第四十五回卒業生三千余名が集い、昭和四十八年度同窓会が催された。本年はこの会が池田上明先生のニックネームをいただき、ピッカー会と称する最初の年に当る。

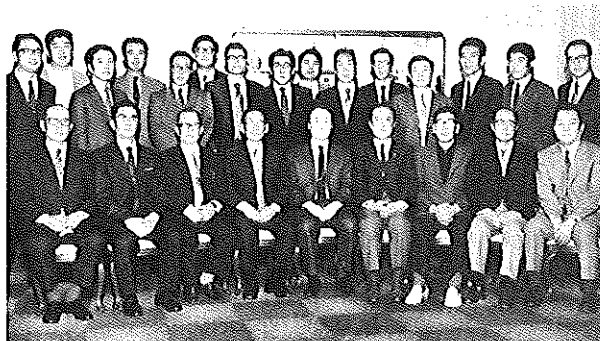
例年、我々の同窓会に、担任の先生方だけではなく、御世話になつた先生方に、出来るだけ大勢出席していただいており、本年も、永井勇一・村上千秋両先生をはじめ、小河清磨・宮川秀一・宮本茂・中島博の諸先生方をお迎えすることが出来、極めて盛大なものとなった。宮本・宮川両先生には、数年振りにお目にかかる同窓生も多く、思い出話にも、一段と花が咲いていた。

振り返つてみるに、我々が甲陽を卒業して以来、すでに九年の年月が経ち、その間、池上先生はじめ数名の学友を失ひ、同窓会の席上で、初めてその様な悲しい報せに接することもあつた中で、本年は幸いにしてそのようなことを耳にすることもなく、かえつて、結婚や二世誕生の話題が席を賑わせていたのが何よりの喜びであつた。アルコールも程よく回つた頃、先生方の御挨拶があり、永井先生には執筆にお忙しいながらも楽しくお過ごしとのことであり、村上先生はじめ諸先生方も、ますます教育に情熱を傾けておられる御様子であつた。だが、甲陽においては数年来の紛争がまだ尾を引き、先生方の御苦勞も一方ならぬものがあると同うにつれ、先生方が健康を損われることのないようにと願う次第であつた。続いて同窓生の近況報告に、いつしか時の経つのも忘れる程であつた。最後に一同肩を組み、学院歌を高らかに斉唱し、名残り惜しいうちに閉会となった。

最後に、今回は卒業十周年にあたり、既婚者も多数になるので家族連れでの案に幹事も非常に張切つている折から、この紙面を借りて、同窓生諸君のたいなる参加を希望する次第である。

(鈴木 俊雄記)

野 球 部



《敬称略》

一九七二年度のOB懇親会を10月28日夕刻、大阪梅田四川料理重慶飯店で開催、大先輩山野井氏(4回)の音頭による乾杯から、現野球部長の吉井部長からのユニホーム寄贈に対する謝辞、会計報告、世話役の交代とごやかかつ盛大裡に懇親会を終えた。72年までは塚本慶太郎氏(16回)に世話役を願っていましたが、73年度より野田正男氏(11回)に世話役を願うことになりました。尚、当日の出席者は下記の通り、()内は卒業回数、

山野井萬(4) 二宮猛(10) 野田正男(11)
 浜辺正義(12) 真島 登(13) 塚本慶太郎(16)
 九岡邦康(17) 芳村富夫(19) 小前博文(19)
 真多 繁(20) 波々伯部甲子太郎(20) 佐藤安弘(22)
 播間 勇(38) 前川勝彦(38) 布谷徳則(39)
 内田昭太郎(40) 北川公一(41) 松田信臣(41)
 五十田安夫(41) 守殿貞夫(41) 梶原 廣(41)
 中明孝夫(42) 金島克己(43) 吉藤賢了(43)
 米田雅一(45) 末田 昭(48) 吉井野球部長

クラブの現状

猫の首に鈴がつく

毎年正月に行われる全国高校サッカー大会(本年51回)のプログラムの大会記録の中に甲陽の名前が大正11年5回大会から全14年の8回大会まで名前がのっています。30回大会から毎年この大会を欠かしたことの無い小生にとつて、再び甲陽の名が登場する日を念じなかつた年はありません。勿論これは甲陽サッカー全員の願いであり、いつか必ず達成しなければならぬ目的であります。新制になつて間もない昭和29年部員不足に悩みながら、当面のステップとして灘校との中高OB各定期戦(毎年5月)を設けました。翌年からは正月3日に初戦会を恒例の行事として続けています。今の所この年2回がOBと現役が顔を合せる機会になっています。中学部には甲関戦という素晴らしい目標も出来て既に20回になります。

田村昭二氏(23年卒)が中学部を監督して一昨年は県下ベスト8、昨年は決勝に進出しました。そして今年は高校監督に新井条一郎

君(31年卒)が就任5年プランで全国大会出場を果せようと言う訳です。中断してたOBのチーム「甲陽クラブ」も西宮社会人リーグに参加しよう準備中です。甲陽サッカーに指導者が必要」という命題に、そんな事は解かっているのだ。「猫の首に鈴をつけたら良い事はわかつているが、誰(わずみ)が鈴をつけにくいのだ。」という話と同じである。と論争したのも10年前の話です。今年は上記田村・新井両氏が張り切っています。又兵庫蹴球協会の技術委員長に大先輩ベルリントン・ピック代表西邑昌一氏(9回)高体連サッカー部長に清水宏幸君(西宮東高教諭30年卒)又日本蹴球協会技術委員、元全日本代表水野隆(旧姓徳弘23年卒)氏も名古屋から見守つていただいています。古い歴史をもつ母校サッカー部の伝統の灯を消さないで頑張らなくてはなりません。今年の初戦会は若手を中心に20名余が集つて盛会でした。積小致大をモットーに必ず花開く時が来る事を誓い合いました。どうぞサッカー部に御声援あれ!

中村光成(29年卒)

◇ サッカー部

- 中学 四十七年度の公式戦成績
- 【対灘中定期戦】甲陽〇―一灘
- 【市内大会】 第三位
- 【阪神大会】 準々決勝で敗退
- 【甲関戦】 甲陽一―二関学(延長)
- 【兵庫県大会】 第二位
- 通算成績 十九戦十二勝七敗

甲関戦、灘戦で勝利を納められなかったことが残念だが、三年最後の県大会で才二位という予想以上の成績をあげ、有終の美を飾ることができたのは良い思い出になるだろう。さて、現在は二年生が新チームを結成し、もう間近に迫つた新人戦にそなえ、練習にはげんでいる。この調子でいくと、新人戦でもかなりの成績をあげることができるだろう。また、灘戦はもちろん甲関戦にも勝利を納めるのではないかと希望をもっている。

● 高校四十七年度公式戦成績

- 【県総体】 三―〇夢野台 二―一豊岡
- 〇―六市尼崎 市民大会で自信をつけ、夢野台を一蹴した。二回戦では予想外の苦戦をし豊岡に辛勝した。三回戦では豊岡戦からの、コンピュータシヨンの欠陥が顕著に現われ、また、雨中戦での体力のなき、主力選手の欠場などで大敗を喫つた。

【対灘定期戦】 六月二十五日

甲陽一―〇灘 暑い日であった。その為前半は灘に押しされ気味であった。しかし、後半に入り灘に疲れが見え始め、甲陽が終始押し気味に試合を進めた。だが、フォワードに決定力を欠き、試合は引き分けるかに見えたが、終了間際右からのコーナーキックから得点し勝利を得た。

◇ 今年の展望

今年は三年生が五月の総体まで残ることになつているので、昨年のように急造チームで

臨むことはなく、かなりの活躍が期待されるそれに加えて、昨年県二位の成績を残した新一年生が多数入部するので、選手層が厚くなり、チーム力が充実するであろう。

OBの新井氏が監督に就任されたので、戦術面での進歩も期待できる。今年の最大の目標は、市内一位の西宮東に勝つことである。

◇ 野 球 部

- 甲陽3―2 県立芦屋高校
 - 甲陽11―2 御影工業高校
 - 甲陽1―7 報徳
 - 甲陽13―0 関学(五回コールド)等
- 昨秋は、不覚にも県大会出場をたせなく、悔いの残るシーズンでした。しかし、練習試合において、県大会出場の御影工に大勝利、また県ベスト8の県立に対して戦後初の勝利を収めるなど、強豪に土をつけています。
- 今のチームの特色は、相手によつて強くもなり弱くもなるということです。強豪に一歩もひけをとらないかと思うと、大事な時に取りこぼしをしたりするので。しかし、この欠点も、冬のトレーニングにおいて精神的に一年生が力をつけ、自信を持つたことが大きいと思います。昨年からのエース塩見も、一段とたくましくなり、昨年以上の期待が持てます。また、打線の方も、塩見、池田、水杉、久保らには一発の力も十分あり、例年にない大型打線となっています。

このように、今年は攻守守に大型で、昨年以上に期待できます。だから、これから夏までに一層チームワークを固めて、まとまりのあるチームにしていきたいと思つています。

去年の夏の大会では、期待されながら惜しくも2回戦において惜敗しました。しかし、今年はこの苦い経験を足台にして、悪くともベスト16進出をはたしたいと思つています。

OBの方々とともに、よろしく御支援をお願いします。